

江戸城外濠と五番町おもいでばなし

中央線の電車が御茶ノ水駅を出ると、車窓の北側に神田川の堀割が続く。飯田橋までは運河の様相を呈しており、神楽河岸・揚場町など江戸時代の水運を物語る地名が数多く残されていた。

飯田橋を過ぎると神田川の水路ではなく、江戸城の外濠が車窓間近に現れる。市ヶ谷駅を過ぎてしばらくすると外濠は埋められて野球場や公園など様々な物に生まれ変わっており、何十年かするとここに外濠があったことすら忘れられてしまうのかもしれない。

その外濠は、何カ所かで分断されていてはいたが、石垣が残っているところが多かった。

赤坂見附、喰違見附、四谷見附、市ヶ谷見附、新見附、牛込見附など「見附」と名が付く停留所が並んでいて、小学校6年生で他県から移住してきた私にとっては物珍しいものだった。

調べてみたら「江戸城の見張り番所の跡」だということがわかった。門があって見張り番がいて、江戸城内への不審者の立ち入りを監視していたようだ。

飯田橋駅の西口（神楽坂口）を出ると、外濠の跡は貸ボートもある都心の遊び場になっている。中学生の頃、魚釣りや水遊びの場所だった。城内に向かう角に大きな石垣が残されているが、これが**牛込見附**（牛込御門）の跡。牛込御門を潜って真っ直ぐ進むと内濠の田安門へ一直線で、北の丸につながっている。

牛込見附から南西に進むと**新見附**があるが、ここには御門の石垣は残っていない。当初は長い外濠が横たわっていたのだが、明治時代にこの地点を埋め立てて濠を二分して道路を作った（新見附橋）。おそらく外濠と城内を結ぶ主要道路は「見附」「門」と名が付いていたのでそれに合わせて「新しい見附」と名付けたのに違いない。城内に入ると、左に法政大学のキャンパスが広がる

さらに南西に進むと**市ヶ谷見附**。ここは江戸の地形を確認するのに最適な場所だ。城内に目を向けると日本テレビを通過して麴町4丁目へ向かう上り坂、外濠を挟んで城外に目を向けると牛込の丘陵に上がるいくつもの坂が見られる。市ヶ谷という谷を感じる事ができるのが面白い。靖国神社方面へ向かう道はやがて九段坂を下りさらに低い所へと下っていく。市ヶ谷見附から土手に沿って四谷見附方面へ進むと、外濠の土手の上を歩くことができる。土手の下を走る中央線、その向こうに横たわる水を湛えた外濠、気持ちの良い景色を楽しみながら散策することができ、子供の遊び場所としても最高の場所だった。「外濠公園」という表札が埋め込まれた石柱が立っていて、「土手公園」と呼ぶことが多かった。昭和30年代にはまだ「戦後の混乱」が残っていたせいだろうか、土手下のバラックに住む人もいた。

四谷見附は、甲州街道につながる内藤新宿からの道が城内に入る所になる。四谷という地名は、「四つの谷が入り組んでいた」と想像できるが、この説の他にも多説あり真実はわからないらしい。

四谷門の名残の石垣の上には、後の世で国土地理院が三角点を設置した。この三角点からは富士山が見えるので、夕暮れ時にはよく石垣の上へ登ったものだ。四谷駅の四谷口が窪地になっているのは、ここに外濠があったことを示しており、新宿から来た地下鉄丸ノ内線が一瞬地上に出て外濠を跨いでいた。



赤い丸ノ内線の下をチョコレート色の中央線が御所トンネルに出入りする瞬間、そこに都電の③番が空堀の縁を危なげに走る様が重なる景色は絶品だった。

四谷駅麴町口から再び土手に上がれるようになっていて、大きな松が林立する土手の上から見下ろすと上智大学のグラウンドが大きく広がるがこれも外濠の名残。グラウンドの西端からホテルニューオータニの方へ進む道にあったのが喰違見附。喰違門を潜ると、井伊掃部屋敷（現在のホテルニューオータニ）尾張殿屋敷（現在の上智大学）・紀州殿屋敷（現在は清水谷公園）があった。「喰違」の名は御門と橋の構造から付けられたものらしい。「喰違見附」という名前の響きが気に入って、中学校からの帰り道で清水谷公園を通過してわざわざ遠回りをしたことが多かった。

さらに緩やかに下って行き、弁慶堀が長く伸びる谷間の底に出た所が赤坂見附。城外に赤坂という地名があるが地名の由来は諸説あって明らかではないらしい。赤坂御門の南に延びる長い堀割は地名の起源でもある「溜池」。

市ヶ谷駅から麴町に上っていく坂道（現 日本テレビ通り）の中程に「吉行めぐり美容室」という変った名前の美容室があることに気がついたのは小学校6年生の時だった。この頃は、パーマメントや美容室などというものは、一部の富裕層の人たちのものだったので、田舎から出てきた6年生には「不思議なもの」だった。

吉行めぐりという人は、作家の吉行エイスケの妻で美容室の先駆け。息子が作家の吉行淳之介であることを母から聞いて知った。（後年 NHK のドラマにもなったので今では知らぬ人はいないようだが・・・）

中学生になり、吉行淳之介という作家は何やら「いやらしい話」を書く作家らしいと認識するようになった。文学者としての認識になったのは高校生になってからのことだと記憶している。

ある日の夕方、市ヶ谷から四谷に向かう土手の上で遊んでいたら、土手の中央に立って動かない女性の姿が目にとまった。怖い物見たさも手伝って、散歩するふりをしてわざわざその近くを歩いて顔をちらりと覗いて見た。その人は、いささかけげばしさを感じるショールのようなもので上半身を装い、土手の下を走る中央線の方に向かって何やら意味不明な言葉を口走っていた。気が狂った女？ 気持ち悪いし怖いので、少しずつ遠ざかった。土手下にはバラックが数件立ち並ぶ所で、何となく気分の優れない光景ではあったが、ここは我々地元の子供達の遊び場でもある。この人とはその後も何度か遭遇した。

それから何年かあと新聞紙上で、作家吉行淳之介の妹で若手俳優の吉行和子の存在を知り、その顔写真を見て驚いた。顔写真は、あの時土手で遭遇した気味の悪い女だった。

今思えば、若手駆け出しの女優は静かな外濠の土手に出てセリフの稽古をしていたのかもしれない。

そして、それからまた何年かして映画好きになった私は、何本かの映画で女優吉行和子を見た。演技力の優れた素晴らしい女優になっていた。

昭和 32 年4月18日（中学一年の春）の日記に、こんなことが書いてあった。

二、三日前に「迷子の猫を探して下さい」という広告が入っていた。その猫と同じ猫が家の近所にいつので出てくるのを待っていた。やがてへいの中から出てきてニャーニャーとさわいでいたので、広告にあるように「ノラや」と呼んだらなれなれしく返事した。これはたずね猫にちがいないと思った。

猫をつかまえるにはどうしたら良いだろう。

たかが猫一匹で広告を出したりして、随分金がある変った人がいるものだとして笑って終ってしまったのだが・・・

大人になってから、内田百間の著作をいくつか読んだ時に「これだったのか!」と気がついた。氏の著作の中に「ノラや」という作品があり、その奇抜な内容に驚いたものだ。また、この内田百間の生き方を映画にしたのは黒澤明監督で、「まあだだよ」という題名だった。「ノラや」は、佐藤春夫の「さんま さんま さんま 苦いか塩っぱいか・・・」とともに、他に類を見ない作品として若い私の頭に鮮やかに残った。

内田百間氏は五番町・六番町に、吉行淳之介氏・和子氏は五番町に長く住んでいた。今思えば、我が家が住む町の一角に著名な方々がお住まいだったのだが、6年生から中学生ぐらいの私には全く認識も興味もない存在だった。世の中には、後になってから「そうだったのかあ」と気づくような出来事はいくつもあるものだ。

以上